

瞑想と行動

——21世紀の宗教のための新しいパラダイムへ向けて——

ロバート・キング

来る世紀には、人類史上例をみない、地球規模にわたる異文化交流が起こるだろうと、我々は期待することができず。さまざまな国籍、人種、宗教を持つ人々が、かつてなかったようなやり方で互いに関わりあうだろうということは、ほぼ確実です。このような新しい状況から生ずる宗教どうしの出会い、ボスニアで起きたような激しい戦いを招くかもしれませんし、逆にお互いを豊かにし、精神的な再生をもたらすかもしれません。宗教が互いに対立していた時代においては、一つの文化が別の文化の領域を侵すのが常であり、しばしば征服者が、自らの生き方を被征服者に押しつけようとする結果になりました。しかし、グローバル・コミュニケーションの時代である現代、地域の境界はその意味の多くを失い、意見のより自由な交換が生活のあらゆる領域で起こりつつあります。このような状況において、宗教は疑いなく、過

去のものとはまったく違った相互関係に入りつつあります。

宗教間の、新しい形での出会いが、既に始まっているというきざしはいくつもあります。一九六〇年代の半ばには、法王パウロ六世が、第二バチカン会議において、他の宗教的伝統に属する人々と対話を始めるよう、カトリック教会に命じました。プロテスタント諸宗派の主流を代表する世界信徒会議も、他の信条やイデオロギーを持つ人々との会話を要請していました。このことに励まされて、キリスト教徒は様々な形で、様々な状況で、ユダヤ教徒、イスラム教徒、ヒンドゥー教徒、仏教徒と、互いの共通性や相違について議論を始めていました。このような出会いのインシアチブをとったのは、必ずしもキリスト教徒とは限らなかったし、その議題も、必ずしもキリスト教的なタームの枠組みに限られていたわけではありません。チベット仏教の精神的指導者であ

るダライ・ラマは、このような宗教間の会議を多く開催し、自らも参加しています。他の宗教的リーダーについても同様です。今日では、異なる伝統を持つ多くの人々が、互いを知りたいという純粋な欲求から協調を行なっています。またさらに、核兵器拡散、環境汚染、人口過剰、天然資源の枯渇など、人類の生存を深刻に脅かす地球規模の開発に対する関心も、これらの協調の原動力となつていきます。新しい情報技術の急速な拡大が、世界のほぼ全域にわたつて迅速なコミュニケーションを可能にしているのも、近い未来には、さらなる意見の交換と、関心の集中が起こるだろうと予測されます。この新しい状況が、結果として何をもたらすかを考えることは興味深いことです。

私はここでいただいた短い時間のなかで、新しい時代に起こり得る結果の一つについて探究したいと思います。それは、瞑想(contemplation)と行動とを統合する、宗教の新しいパラダイムの出現です。瞑想と行動という精神性の二つの様相は、極めて重要な宗教のどれにも存在するものです。しかし、どの宗教においてもきまつて、瞑想と行動のどちらかだけが発達しています。比較のために、キリスト教と仏教について考えてみましょう。どちらも二〇〇〇年以上の間、互いに独立に発達してきた主要な宗教です。最近まで両者は別々の影響圏を持っていました。すなわち、キリスト教はヨーロッパとアメリカで優勢な宗教であり、仏教はアジアで多数を占める宗教的存在でした。とはいえ、両者は

歴史的には異なった発展の道程をたどっています。キリスト教の修道院制度は、中世をとおして西洋文化に強い影響を与えていました。しかし、19世紀までに修道院制度は軽視されるようになり、多くのキリスト教徒はその熱意を社会改革に向け始めたのです。それに比べると、仏教はその宗教的基礎を隠遁的な共同体に置きつつけており、時の政治体制に挑むことはめつたにありませんでした。そのため、仏教徒はキリスト教徒に比べ、瞑想により重きを置く傾向があり、また、キリスト教徒は、少なくとも啓蒙期以来、社会的行動を重視してきたというのを、見て取ることができます。

ところが、二つの宗教的伝統がともに対話を企て、地球規模的な問題を扱うに際して共同戦線を張るとき、瞑想と行動との伝統的なバランスは変化する可能性があります。アメリカの指導的な神学者であるジョン・カプの言葉で言えば、我々は「対話を越えて」相互変革へと向かう運動の目撃者となるでしょう。どんな対話も、もし両陣営が相手の言葉を真剣に聞けば、変化ということの可能性を孕んでいます。けれども、もし両者が宗教的実践を共に行なうなら、変化のチャンスはさらに大きくなります。仏教徒とキリスト教徒に関する一般論を述べる代わりに、私はこの種の変革とあゆみよりの例となる二人の人物に焦点を当てようと思います。このような変革は、共同の宗教的実践と、対話の正しい開放性がある、初めて可能なのです。その二人の人物とは、キリ

スト教の瞑想者、トマス・マートンと、社会に関わる仏教者、ティック・ナット・ハンです。二人は、お互いを深く尊敬し、その著作によって広く国際的な信奉者を得たのです。

トマス・マートンはその青年時代に、ニューヨークでの活発な社会的、知的生活を止めて、ケンタッキーの田舎でトラピスト会の修道士となりました。修道院での研究を通じて、彼はキリスト教の瞑想的伝統へ深く引き込まれましたが、この伝統は修道院の外にいるキリスト教徒には、ほとんど無視されてきたものでした。一九五〇年代のはじめに、大修道院長のすすめで、彼は自分の瞑想経験について書き始めました。そして、彼の著作は多くのキリスト教徒の、そしてまた、キリスト教徒以外の人々の心の琴線にふれたのです。マートンは、瞑想をひとつの覚醒経験として語ります。それは、我々の生における、神の創造的、動的現在を直観的に把握することです。彼が主張した覚醒は、普通エゴと同一視される「外の現象的自己」の機能ではなく、「深層の超越的自己」の機能です。「超越的自己」は、観察や反省を超えており、内的生活に価値を与えることのない社会の視点からは隠されています。マートンは、「内的孤独」を欠く人々に向かって語りかけます。彼らの生命は行動によって蚕食され、愛着によって窒息しているのです。そして、彼らの多くがマートンに答えました。マートンの著作は彼自身の宗教的コミュニティや、その外の人々の、深い精神的欲求に答えたのです。

そして一九六〇年代の激動期が訪れると、マートンは公民権運動のために、また、ベトナム戦争に反対して発言を始めました。瞑想的な生活への献身と、社会的抗議への関与とに、彼は矛盾を見いだすことはなかったのですが、教会関係者の中には批判する人もいました。彼は書いています。「瞑想的であることは自己自身のなかに孤立することではなく、心の謙虚さと純粹さによって、現象的な、エゴイステイックな自己から自由になることである。それゆえ、そこには、他者に対する誠実で謙虚な愛に対して深刻な障害になるものはない。」この愛は、個人と個人の関係として現れることもあります。人間を虐げ、破壊する社会システムへのアクティヴな抵抗という形を取ることもあります。彼はあらゆる形の戦争に反対し、自ら非暴力主義に与しました。彼は非暴力主義を謙遜と愛の精神に最もふさわしい抵抗の形だと考えていました。マートンにとって瞑想と行動との接点は、神の意志でした。瞑想によって人は神と合一し、瞑想は神の意志との一致を必要とします。神の意志とは愛なので、瞑想的な意志はおのづから他者への愛によって行動します。マートンによれば、内的な瞑想と外的な行動とは、神への愛という同じものの二つの側面にすぎないのです。

ティック・ナット・ハンはマートンより若かったのですが、二人が隠棲生活に入ったのは同じ一九四二年のことでした。ナット・ハンはベトナムで、臨済宗の禅僧として修業しました。彼は

ベトナム戦争の時、平和運動のリーダーとして有名になりました。

彼がティエップ・ヒエン・オーダー（ティエップ・ヒエン規律）

をつくったのもそのころです。ティエップ・ヒエン・オーダーは

「社会に関わる仏教」の一形態であり、瞑想生活を続けると同時に、

戦争の犠牲者を助けるという意図のもとに始まりました。

ナット・ハンは一九六六年に、アメリカで講演を行なうために招

かれたのですが、このことで、彼はトマス・マートンを含む多く

の優れた人物と接触するようになりました。戦争の両陣営に対す

るナット・ハンの批判は痛烈だったために、彼はベトナムに帰れ

なくなりました。戦争後ナット・ハンがベトナムの子供たちを助

ける方法を模索しました。しかし、これらの努力は実を結ばな

かったのです。彼はポートビールの窮状に注意を向けるようにな

りました。やがて彼はフランスの小さな村に移住し、そこで瞑想

し、著作活動をし、庭の手入れをし、余生を送りました。

ナット・ハンの宗教的実践の核は瞑想（meditation）です。メ

ディテーションはキリスト教の伝統で言えばコンテンプレシヨ

ンに相当します。禅仏教者として、彼は呼吸に特別に集中する座

禅を強調しましたが、歩きながらの瞑想などの他の形態の瞑想も

奨励しました。あらゆる瞑想の第一の目的は自覚であると彼は主

張します。「我々は現在起こっていることを知るために我々自身

へと立ち戻る、というのも、瞑想は現在起こっていることに對し

て自覚的になることを意味するからである。」瞑想において我々

は自分の感覚や身体や知覚、對して自覚的になりますが、同時に

我々のまわりの世界にも自覚的になるのです。「世界への自覚」

ということは、強調すべき特に重要な事柄です。なぜならナッ

ト・ハンは、瞑想が、苦しんでいる他者への責任を回避する方法

だという印象を与えることを望まないからです。彼は次のように

書いています。

我々が深い瞑想を実践する際、世界が苦しみ、子供たちが飢

えて死に、あらゆるところで社会の不正が行なわれているこ

とを自覚しないなら、真の瞑想を実践しているとは言えない。

それは単に逃れようとしているにすぎない。……けれど「もし

我々が状況とその原因を深く見つめながら実践するなら」

心は自然と共感に溢れ「我々は助けるためには何をすれば良

いのかを理解する。」

「社会に関わる仏教」は、瞑想と行動との間に溝はないという信

念のもとに起こりました。瞑想を通じて自覚を見いだした者は、

他者との相互交流を、他者の「共存性」を理解し、社会とその問

題に自然に取り組むようになるでしょう。

マートンとナット・ハンが瞑想と行動との関係について語る方

法を比較すると、そこには違いがあることがわかります。仏教徒

の思想には超越的人格としての神の概念がなく、そのためマート

ンの場合とは違って、ナット・ハンにおいて神の意志は何の機能

も持っていません。仏教の自覚は、共感と他者を助けたいという

自然な欲求を伴っているもので、それ以上の正当化は必要ないので。自己の概念についても違いがあります。マートンの「超越的自己」は明らかに他者の自己とは違っていますが、仏教徒の場合、自己と他者との区別は完全にありません。ナット・ハンの、「私を真の名前で呼んでください」という題の感動的な詩では、自己と他者は一人の少女と海賊において一致します。「小さな船の難民で、海賊に乱暴されたあと大海に身を投げる」少女と、「理解することも愛することもできない」海賊とにおいて。

東洋の思想、とりわけ禅仏教の思想に傾倒していたマートンは、その生涯のある時期、鈴木大拙とともに、仏教とキリスト教とのこのような違いを研究しました。しかし、仏教徒との対話を進めるうちに、この違いは薄らぐようになり、彼はもはや皮肉ではなく、仏教徒に兄弟として話しかけることができるようになりました。同様にナット・ハンもだんだんと、キリスト教徒との共通の地盤を見いだすようになり、このことは「生ける仏陀、生けるキリスト」と題された、彼の最近の著作からも明らかです。彼は、参加者が互いに学びあう意志を持つかがり、宗教間の対話をすすめる運動を歓迎しています。彼は言います。「我々は、違う伝統において、よく、美しく、意味のあるものが、我々を変えることを認めるべきである。」仏教は非仏教的な要素からできている、それはキリスト教が非キリスト教的な要素を含んでいるのと同じことだと彼は言います。「この二つの伝統の間に作った境界のは

とんどは、人工的なものだ」と。

幸運な瞬間は一九六六年の春に訪れました。マートンとナット・ハンが、マートンの住んでいたケンタッキーの修道院で会見したのです。それがきっかけで、このキリスト教の修道僧は仏教徒の「兄弟」のために手紙を書きました。その手紙は友人たちに、仏教徒の平和運動を援助するように訴えるものでした。手紙の後で、彼は二つの異なる宗教的伝統の実践家が共通の地盤を見いだすとはどういうことかを、雄弁に表現しています。

私はナット・ハンが兄弟であると言ったがそれは本当のことだ。我々とともに修道士であり、同じ年月の隠棲生活を送ってきた。私は多くのアメリカ人に見いだす以上の共通点を持つ。ナット・ハンに見いだし、また、それを口にすることを憚らない。このような絆が承認されることはきわめて重要である。それらは、新しい団結と新しい兄弟愛の絆であり、五つの大陸のすべてで明らかになりつつある。そしてあらゆる政治的、宗教的、文化的境界を越えて、すべての国の若い男女を、理想よりも具体的な、計画よりも生き生きしたものへと統一する。このような若者たちの統一は、世界の唯一の希望である。この統一の名のもとに、私はナット・ハンのために懇願する。ナット・ハンのためにできる限りのことをせよ。もし私があなたにたに意味あることをいえるなら、次のように言おう。私がナット・ハンの立場だったらあなたがたが私にしてくれ

そのようなことはなんでも、ナット・ハンにしてやってほしい。多くの点で私は彼の立場になればと思うのだ。

二年後、マートンはキリスト教と仏教の国際会議に参加するために旅行中、亡くなりました。そのときナット・ハンの弟子が追悼のための詩を書きました。彼女はその詩を「我が師はみまかりたまえり」という言葉で結びました。社会に関わる仏教者として、彼女はトマス・マートンを自らの師と認めたのです。

マートンとナット・ハンとの関係を、来る世紀になしうることの例として取り上げるとき、我々は、違った宗教的伝統を持つ人々でも、共通の問題に直面するとき、互いの尊敬と理解を勝ち取ることができるという結論をだしてもいいと思います。そして、この尊敬と理解こそ、我々が現実的な解決へ向かってともに努力することを可能にするのです。我々はそのために自らの伝統を放棄する必要はありません。ただ、互いから進んで学びつつ、自らの伝統のなから今まで知られていなかった宝を引き出すようにしなければなりません。このようにして、マートンはキリスト教の伝統における教父たちと、禅の伝統における老師たちとの深い共鳴を見いだしました。けれど、彼は自らをキリスト教徒だと言いつづけました。ナット・ハンは、長年仏教のダルマを西洋と共有し、西洋の友人に次のように勧めました。「自らの伝統に立ち返り、いままで触れることのできなかつた価値を、伝統のなかに再発見せよ。」

マートンとナット・ハンがともに、単なる社会活動家ではなく、瞑想的思想家であったことは偶然の一致ではありません。キリスト教徒であれ、仏教徒であれ、瞑想の実践によって、人はきわめて宗教的な共同体の、文化的制限を受けた信仰や実践を超えて、精神性の深い段階へとたたらされるのです。（この偏狭な信仰や実践が常に人々を引き裂き、宗教的共同体どうしの対立の原因になるのです。）それぞれの宗教の違いにも拘らず、人は戦争や飢餓や疫病やその他の自然災害などの大きな危機に直面した時、団結してともに行動することができず。しかし、来る世紀において必ずや直面するだろう深刻な倫理的問題に対して、共通の努力を続けるためには、我々は精神的自覚のレベルで共通の基盤を見つける必要があります。その問題とは、希少資源の分配や環境保護、高齢者のケアなどです。マートンとナット・ハンは瞑想の実践と社会活動を通じて、このような共通の地盤を見いだしました。彼らの例に倣うのは賢明なことだと思えます。

これらの二人の予言者によって示された宗教的パラダイムの特徴はどんなものでしょう。最も顕著な特徴、すなわち二つの宗教の歴史的背景に対して最も注目すべき特徴とは、瞑想と行動との統合です。彼らの考えによれば、瞑想は自然に他者のための行動へと導きます。それは、自発的な共感的行動であり、単に個人と個人との間の行動に止まらず、その時の社会的秩序に挑む行動なのです。瞑想と行動とのこのような結合の鍵は自覚です。自覚な

しの行動は、盲目で、無益で、非生産的でさえあります。自分の目の前の必要を超えたものを理解することのできない、小さな自己としてのエゴに駆り立てられているのです。真の自覚をもてば、我々は行動の領域をより広く思い描き、与えられた状況で、真理と、正義と、慈悲と、愛の要求を理解できるのです。瞑想と行動の統合のためのもうひとつの鍵は、共感です。瞑想はエゴからの解放をもたらし、他の仕方では手に入らなかった、愛という内なる宝を我々に開示するのです。我々は自分たちが、包括し肯定する他者関係にあることを見いだします。もはや敵ですらも、我々と別個のものではないと思えるようになるのです。

次の世紀を迎えるにあたって、我々はこのパラダイムが、二つの宗教共同体を超えて受け入れられるためには何が必要かを問うでしょう。マートンとナット・ハンは、宗教的対話に対する心の広さと、瞑想と行動とを統合する能力において我々の手本となりましたが、彼らは特別な人でもあるのです。瞑想の実践と社会的行動とに関しては、間違いなくキリスト教と仏教の双方から反対があるでしょう。我々がこの反対をどうやって克服したらいいのか、また、そもそも克服できるかさえ定かではありません。新しいパラダイムは、異なる宗教の信仰を持つ人々が、自らの行動を表現するのに用いる言葉がかなり違って、一致協力して行動する方法を示します。けれどもこのパラダイムが、違いを解消するというわけではありません。これらの違いが、宗教のアイデン

ティティーに対して根本的な疑問を投げかけるものだということがわかる時が来るかも知れません。その時は、対話を超える何が必要となるでしょう。だから我々は、このパラダイム・シフトがどこへ到るのか、そして、完全に受け入れられるかどうか明言することはできません。近い将来も、仏教徒は仏教徒で、キリスト教徒はキリスト教徒であり続けるでしょう。しかし、二つのコミュニティが、共通の倫理的関心と、精神的完全性への深い憧れによって歩み寄るだろうということを我々は期待してよいのです。

（比較宗教学、ミルサップス大学副学長）

〔日下部哲夫（文京女子短期大学講師）／清水明美（富士短期大学講師）共訳〕